

# 六段を拝受して

三木市剣道連盟副会長 澤田 薫

5月17日(日)午後、愛知県名古屋市枇杷島スポーツセンターで行われた剣道六段審査会において、私は初挑戦であったにもかかわらず、好運にも合格の栄に浴することができました。これまで諸先生、諸先輩、その他多くの方々から頂戴しました。ご指導、ご助言に対し、心より感謝申し上げます。本当に有難うございました。

## 審査会当日のこと

名古屋の審査は、総勢1301名の受審者で、会場は立錐の余地もないほど。初めてのことで、まずこの人の多さにびっくりしました。57歳の私は午後の部でしたが、あわてないようにと午前1時には会場に着き、審査の様子を観察していました。次々と審査が進むにつれ、実に立派で力強い剣風の人が多いなあ、あの人も、この人も合格間違いない・・・と感心して見ていました。その日は合格率が大変高く、昼の休憩時、主催者の一人が「ギネスブックに載るような合格率」と冗談のように言われていたのが印象的です。

立ち合うお二人の審査を見ることのできたので、少しは落ち着いて臨めたように思います。自分の番の時はただただ気合は負けないように、絶対退かず、初太刀、とにかく捨て身で面を、と心に決め、立ち合いました。私も相手も緊張していて、相面を打つたのは覚えていますが、有効打突にはならなかったと思います。後は流れに任せ、相手を見て、見苦しくないように打つことに心がけていまして。あつという間に「やめ」の声が掛かりました。

二人目の方ともなかなか気が合わず、1本目の面に続き、小手より面、相手の面を返して胴と、あれこれ技を試しましたが、うまく当たらず、バタバタしてしまいました。だから、「ああ、だめだ。やはり昇段審査は難しいものだ。また次に頑張ろう。」と、すっかり諦めていました。

## 大切にしていること

少年剣道教室に週1、2回、そのほか時々紫雲館や他の稽古に行くだけという、他の熱心な方々に比べると、怠け者で稽古量の少ない私です。本当に恐縮しております。ですが、五段合格後から5年間大切にしてきたことを以下紹介します。

### 師の教えを守り、己を変える

昇段に向け、先生方や知人から、自分の悪いところを指摘されました。特に、故安栖敏夫先生からは、竹刀の握りや構えなど、多くを教わりました。

また、平成25年9月、三木市剣連60周年記念稽古会の講師、福本修二範士からも、竹刀の握り、体さばき、足さばきをお教わりしました。さらに、川戸先生や、伊藤先生、黒田先生、神澤正輝先生、小椋先生、田畑先生・・・のほか、書ききれないほどの連盟の多くの先生が私の未熟な点を直して下さいました。この年になっても新しく知ったことはあつて、いかに今まで適当に、我流の稽古を続けていたかを思い知らされました。言われたことを取り入れ改造した結果、左足に体重をかけ、ひかがみを伸ばし、左手の位置を少し前にし、剣先をやや高くする今の構えができ、無駄なく打てるようになってきたと思います。

### 見取り稽古でコツをつかむ

自分には出来なくても、目指す動

きを体現できる先生方の稽古や動きを目に焼き付けるようにしました。特に、打ち間に入る時のタイミングが人により違うもので、触刃から一足一刀までの「攻め」を見取り、先を取って面を打つ動きを繰り返し真似をしました。

### 子どもたちに教える

私は職業柄、平成25年度、勤め先の幼稚園児に月1回、剣道遊びを教えています。また、平成26年8月から、小学校で三木平田少年剣道教室を指導しており、子どもに教えるためには、きつちりと基礎基本を言葉と体で説明できなければなりません。先生方から教わった正しい剣道を子どもたちに分かりやすく伝えることで、自らの剣を振り返り、初心に帰るいい機会が持っています。志染の稽古でも同様です。平田では小椋治朗先生が基本を徹底指導してくださっているので、多くの学びがあり、己の剣道にも生かすように心がけています。子どもたちこそが、忘れてはならない私の大先生です。

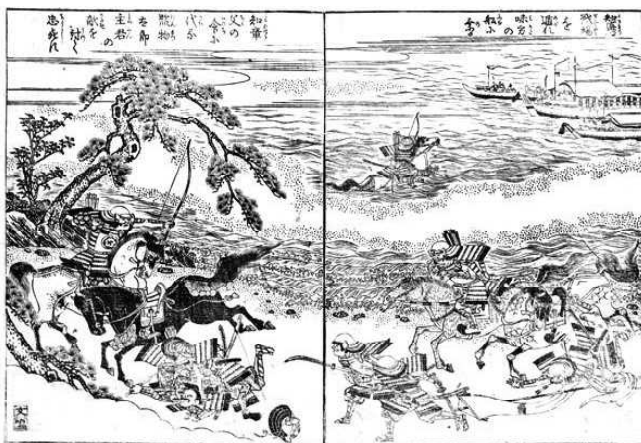
### これからのこと

6月、故安栖先生の墓前に報告し御礼を言いました。そして、いろいろな人と稽古して安栖先生のようにみんなが明るくなるような人間性を養うとともに、「剣道の稽古をもっと楽しく」を目標に、自ら実践し、連盟の発展に尽くしたいと思えます。これからもよろしくお願ひします。乱筆乱文ご容赦のほど。

# 高橋洋三の 剣道よもやま話

## 我が 剣道修業の目標

「平家物語」には「あはれ」を催す数々の名場面が出てくる。人生の機微に触れ、心の琴線に触れる話で一杯だ。数々あるそれら名場面の中で、僕がしみじみ身に染みるのは、巻第九「知章（ともあきら）最期」である。新中納言知盛卿は、生田の森の大将軍であったが、彼を守っていた平家の軍勢は源氏の武者たちに追い散らされ、今は御子武蔵守知章、侍に監物太郎頼方とたった主従三騎となつて、たすけ舟に乗ろうと汀の方へ落ちていく。そこへ早、源氏の兒玉党の武者ども十騎ばかりが追いついた。弓の上手、監物太郎が得意の弓で防ぐ中、源氏一党の大将とおぼしき者が、新中納言知盛に組み付かんと馬を並べたのを、息子の知章が間に割つて入り、むずと組んで落馬し、敵の首を討つたものの、その家来に知章は頸を取られてしまう。助けようとした監物太郎も矢種が尽き、刀を抜いて奮戦したが、左ひざの関節部分を矢で射られて立ち上がれず、座った姿勢のまままで討ち死にした。



その間に名馬に乗った知盛は、海上を2kmほど泳がせて、大臣殿（おほいどの、平宗盛）の舟にたどり着くのである。辛うじて命を拾った知盛が宗盛にしみみ語るのであった。「武蔵守に先立たれました。監物太郎は討たれました。今は心細くなっております。どういふわけで子がおつて、親を助けようと敵に組むのを見ながら、どのような親だから、子の討たれ

るのを助けなくて、このように逃げて参つたのだらうと、他人の事でしたら、どんなにか非難したく思うところでしょうが、自分自身のことになると、よく命は惜しいものであつたよと、今こそ思い知られたことです。人々がどう思われるか、お心の中を思うと恥ずかしゅうございませぬ。」と袖を顔に押し当てさめざめと泣いたという。

知盛は平家の公達の中で、詩歌管弦だけの公家化した軟弱な男ではない。武將として戦場にも出、勇敢に戦う大将であつた。その場に及んで卑怯な振る舞いをする人とも思えないが、大将がむざむざ討たれては味方の士気にもかかわると思つたのであろうか？とにかく息子を犠牲にして助かつたのだつた。僕がこの話と共に思い出すのは、映画「タイタニック」に出てくる一場面である。北極海の巨大氷山に激突した豪華客船タイタニック号は今やその巨体を傾かせ、間もなく海底に沈もうとしている。人々は数少ない救命ボートに乗り込み、残り一人分しか余裕がない。その時、愛する女性をむりやりボートに押し込んで、男は静かにボートを沖へ押しやるのである。泣き叫ぶ女性（恋人？）を無言で見つめつつ万感の思いを込めて、沈みゆく船か

ら押しやるのである。間もなく男は船に残つた男たち（楽団の人たち、船長など）と共に海底深く沈んでいった。



無論こういう場面は映画でなくともたくさんあつた。何の前触れもなくソ連軍が攻め寄せてきた満州で、ハルピン駅のプラットホームに立つて、すし詰めの列車に子供ら家族を無理やり押し込み、送り出し、自らはソ連軍に抑留された多くの男たちもそうだつた。タイタニック号に残つて、恋人をボートに乗せ見送つたのち、船に残つた男のそれの如き「肚を作る」ことが出来たら、私の剣道修業は「これでよし」と思うだろう。

（高橋洋三）